

■ アレルゲン皮膚テストの実際 ■

Skin allergy test

関谷 潔史

国立病院機構相模原病院アレルギー呼吸器科医長

はじめに

アレルギー性疾患を診断する際には、原因となるアレルゲンを見つけ出すことが非常に重要である。そのなかでI型アレルギー診断の際に用いられるアレルゲン検索法としては、皮膚テスト・特異的免疫グロブリン(immunoglobulin；Ig)E抗体の検出(CAP-RAST法やMAST法など)・ヒスタミン遊離試験・アレルゲン誘発試験(抗原吸入試験・鼻粘膜誘発試験・眼反応など)があり、これらの試験を用いて原因アレルゲンの同定を行うことは、診断のみならず治療方針の決定をするうえで必須となる。即時型アレルギーを検査する皮膚テストには、プリックテスト・スクラッチテスト・皮内テストがあり、プリックテスト⇒スクラッチテスト⇒皮内テストの順で、体内に入るアレルゲン量が増加し、感度は高くなる。当然アレルゲン量が多いほど、アナフィラキシーを起こす可能性が高くなることを認識しておく必要がある。I型アレルギー疾患の治療において、原因アレルゲンの回避は不可欠であり、皮膚テストの有益性が危険性を上回ると判断できるなら、積極的に行われるべき検査法である。本稿では、当院で実際に行っている即時型アレルギー皮膚テスト(プリックテストおよび皮内テスト)の実際について写真を交

えて紹介する。

I. 即時型アレルギー皮膚テストの種類

1. プリックテスト¹⁾

皮内およびスクラッチ用アレルゲンエキスを1滴落とし、ランセット針や26G針で皮膚に刺す方法である。一度に多くのアレルゲンを検査することが可能であり、体内に入るアレルゲン量も少なくすむため、比較的安全に行うことができる。診断に用いるアレルゲンエキスは、ダニ・ハウスダスト・花粉・真菌・食物などさまざまなものが市販されており使用可能である。国内で市販されているアレルゲンエキスに関する情報は、鳥居薬品株式会社のホームページを参照していただきたい。また海外でのみ販売されているアレルゲンエキスに関しては、公益財団法人日本アレルギー協会を通じて入手可能であるが、日本で医薬品の承認を受けていないアレルゲンエキスを使用する際には、同意書の取得が必要である。

Prick by prickテストは、新鮮な果物や野菜そのものを用いて検査する方法であり、食物アレルギー診断の際に有用な方法である。材料そのものに直接ランセット針を刺し、それを用いてプリックテストを行う。